

節目となる選考会

佐藤 信

COVID-19感染症の影響下、昨年に引きつづいて「社会的距離」の確保、アクリル板による隔離、マスク着用、検温と指先消毒など、主催者側の気苦労がしのばれる選考会、受賞発表・公開選評会だった。今回は状況を考慮してこれまでの「年度内上演作品」という枠組みが外され、オンライン上演や未上演の作品の応募が可能だったが、大賞、佳作ともにその未上演作品、しかも初応募作家の作品が受賞し、発足以来二十八年目を迎えた賞としてもひとつの節目となる選考会だったと思う。

イトウワカナさん『砂利はポルカで踊る』

雨の中を移動するバス（密室）という着想、十五年の時を経て喪失した故郷と向き合う主人公という設定、いずれもが的確で作品の主題である現代社会の「（あえて強めの表現を用いれば）病理」へ向けられた作者の視線に共感し、高く評価した。人びとの会話を巧妙に描き出す力量が、言葉にできないもどかしさをより深くとらえる感性によってさらに磨かれていくことを期待する。

久野那美さん『行き止まりの遁走曲（フーガ）』

頭の中でつくりあげた世界が実際に目の前に出現して、そこで本物の人間が、泣いたり笑ったり恋をしたりする。そんな戯曲を書くということの基本的な面白さに惹かれた作者のワクワク感が率直に伝わってくる作品。勢いのある自由奔放な想像力が、作者としての「神」の視点にとどまり、登場人物ひとりひとりの視線を通した光景にまで展開しなかったのが残念だった。

くるみざわしんさん『白地に赤く、日の丸とカッポウ着』

「国防婦人会」「愛国婦人会」の葛藤という史実を通して、まぎれもない「いま」を描こうとする作者の筆致は安定し説得力がある。惜しむらくは、作品がときおり過去のドキュメントの域にとどまり、カリカチュアされた「喜劇」にまでは昇華しきれていなかったこと。選考会の評言で、多量の資料の読み込みを強調した理由もそこにある。たくさんの「笑いの種」を拾うために資料を読む。

高橋 恵さん『ダライコ挽歌』

丁寧に描かれた近過去の情景が、単なる郷愁としてではなく、ほぼ三十年あまりのぼくたちの社会の閉塞状況の基底としての確に描かれた、切実で重い内容を感じさせる作品だった。気負いのない作者の姿勢がともすればわかりやすい小品の印象を与えるが、実際の舞台で再演を繰り返すことによってより、深まりはどこまでも増していくテキストだと思う。

田辺 剛さん『クローゼットQ』

意味と内容は少し違うが、久野さんと同じように、舞台という場所での「遊び」を仕掛けるワクワク感と企みにあふれた戯曲として楽しく読んだ。ただ、作者のその弾みが、登場人物の言葉、行動にまで届き切らず、ときどき思わぬ停滞を感じさせてしまうのはなぜだろう。テキスト段階で、いったん立ち止まってすべてを見直してみる作者の「推敲」作業が強く望まれる作品だった。

山村菜月さん『その桃は血の味がする』

選考会では、「AIが書いたみたいな戯曲」と、ちょっと物騒な発言をしてしまった。撤回するのは卑怯だと思うが、新鮮な会話を描き出す新しい才能への言葉としてはやはり舌足らずだったと反省している。言いたかったのは「からっぽ」ということだ。それは時代の普遍的な「からっぽ」を作者が直感的にとらえているということにもつながり、さらに言えば、「からっぽってよくないことなの？」という問い返しにもつながっていくかもしれない。山村菜月さん、しばらくは周囲の雑音を気にせず、書きたいことを書きたいようにどんどん書いて下さい。おめでとうございます。

山本彩さん『花を摘む人』

選考委員のひとり樋口ミユさんも指摘した、「摘む花」という言葉から感じる花のイメージと、ヒマワリという花のイメージとの不似合い感のほかは、感想は「いいホン！」の一言。

山本彩さん、おめでとうございます。上演が楽しみです。